

域在住高齢者における社会参加と IADL との関連

富岡公子、車谷典男、細井裕司

奈良県立医科大学県民健康増進支援センター

背景：地域住民を対象に社会参加と IADL との関連を調べた研究は少ない。この研究は地域在住高齢者の社会参加と IADL との横断的関連を調べた。

方法：奈良県に在住する 65 歳以上の住民 23,710 名に対して自記式アンケート票を配布し、74.2%の回収率を得た。基本的 ADL が自立している 14,956 名の回答者（男性 6,935 名と女性 8,021 名）を解析対象とした。社会参加を測定するために、社会グループの数、種類、および頻度を用いた。社会グループはボランティアのグループ、スポーツ関係のグループ、趣味関係のグループ、老人会、自治会・町内会、および教養関係のグループとした。IADL は老研式活動能力指標を用いて評価した。統計解析は性で層化したロジスティック回帰モデルを用いた。

結果：基本属性、健康状態、生活習慣、ADL、うつ、認知機能、社会的ネットワーク、社会的支援および社会的役割を含む交絡要因で調整後、男女共に、様々な社会グループに参加することは IADL の低下と有意な逆相関があり、より多くの社会グループに参加することと IADL の低下を持つ人の割合がより低いことの間に関係が認められた。頻繁な参加と IADL の低下に有意な逆の関連が認められたのは、女性ではすべての社会グループ、一方男性ではスポーツ関係のグループと老人会に限定された。

結論：我々の結果は、様々な社会グループに参加することは、男女共に、地域在住高齢者の IADL の自立と関連していることを示した。しかしながら、頻繁な参加の IADL への良い影響は男性より女性が強いようである。

キーワード：社会参加、IADL、サクセスフル・エイジング、機能低下、性差、高齢者